

朝鮮の鎌

—韓国三国時代を中心とした鉄製鎌の様相

服部敬史

—要旨

朝鮮半島南部、韓国の三国時代の鉄鎌を集成し、形式分類と年代根拠を集めて編年する作業を試みた。しかし不思議なことに鉄鎌出現から茎付鎌が登場するまで大きな形態変化がないことを確認した。次に600点を超える資料から鎌の法量を統計処理して特徴を導き、地方によって鎌形態と使われ方が異なることをあきらかにした。三国時代の鉄鎌は古墳副葬品が大半であり、その墓制は階層差をもっている。ここに注目して鉄鎌所有の階層を探った。この結果、韓国南部とくに嶺南地方では有力層が鎌所有者であり、嶺北部から湖南地方は中間層以下の農民層の所有が想定できるとした。これは南韓の地形・気候の地域差から北方に畑作・南方に稲作が伝統的に行われたことと関係している。そこで採用された鉄鎌の形態差や法量差が生じるとともに、稲作地帯の生産力の高さを背景に有力層が出現したことを物語っている。

はじめに

収穫具としての鎌は、石器から出発し金属器が発明されると直ちにそれに置き換えられ、間もなく鉄器化した。わが国には弥生時代に入って直ちに鉄製鎌が登場している。この出現は、稲作農業の伝播とともに将来されたことはあきらかであり、朝鮮半島あるいは大陸と密接に関係している。

日本における古代の収穫具は鎌に代表されるが、鉄製品に置き換えられると、その切れ味の良さから根刈り法の採用をみることになったとする。

一方、日本古代において鉄製品はきわめて貴重で、その保有は限られた範囲にならざるをえないと推定されている。そこに階級社会を重ねて鉄器の所有が優位に立つ歴史法則を導いてきた。その中で鉄鎌は、最も普遍的に行きわたった農具である。したがって鎌以外の鉄製農具の保有は、また別の要素が働いていると考えられた。その代表的な農具は耕作具の鋤・鍬である。これらは耕作具としてよりは開墾具としての用途が大きく耕地拡大などに貢献した。この鋤・鍬もまた時期をずらした朝鮮半島からの将来品である。

このように、わが国の水田農耕は、多くが半島と緊密に結びついていることがあきらかだ。それでは彼の地の農法や農具がどのようなものか大いに気にかかるところである。と

くに収穫具の鎌と開墾具としての鋤・鍬の関係は日本でも過去課題となった論点である。朝鮮半島がわが国農法の出自である限り、その性格も伝来したとしてよいであろう。そのことをとくに資料の多い鉄製鎌から探ることはできないであろうか。本論のテーマをこうした視点に定めてみたい。

1 研究史的視座

まずはじめに研究史を振り返って問題点を抽出する必要がある、しかし私は本稿で目指す主題に関する論点を、韓国や北朝鮮共和国の先行研究からみつけることができない。したがってわが国で進められた研究を座標に、半島の調査例をみる立場に立とうと考える。

鉄製農具を歴史の前線に引き出したのは都出比呂志である(都出 1967)。都出は弥生時代から古墳時代の鉄製鎌、スキ・クワ(カタカナ・漢字の書き分けは論者の表現による。以下同じ)を取り上げ、型式差や年代観をもとに日本固有の形態の出現(鉄製方形板スキ・クワ、直刃状鎌)とつづいて朝鮮半島から新たな形態(U字形スキ・クワ、曲刃鎌)の導入と転換を論じた。この時期は前者が弥生時代中期に、後者が古墳時代中期に興った大きな変化であると主張した。とくに後者のU字形スキ・クワは、その強靱な機能から大いに開墾作業や乾田起耕に役立てられたとし、古墳時代中期の飛躍的發展をもたらしたと説いている。この農具の所有形態が、収穫具と耕作具ではかなり異なり、スキ・クワは僅少で鎌は多数であり、しかも前者は出土傾向からみて一部に独占されていることを明らかにした。すなわち農具の保有に格差を見出したわけである。この指摘をうけて、古墳出土ではない集落出土資料を用いた論考が発表される。東国資料であるため、その対象は奈良・平安時代に偏るが、その時代に下がってもまだスキ・クワは特定の住居に独占されている様相が明確であった。土井義夫はこの状況について「8・9世紀における東国の一般農民は、広汎な鉄製農具の普及にもかかわらず、開墾、耕作用具としての鉄製クワ・スキ先の私的所有を実現していなかった」と述べている(土井 1971)。これに対して鉄製鎌はほぼ個別家族単位の所有が認められるようになったという。このように鉄器保有のアンバランス傾向は、すでに古代史の原島礼二から注意されていたが(原島 1968)、耕作・収穫具に峻別して検討した視点は鋭い。高橋一夫は、このスキ・クワの集中管理は富豪層に、鎌は家父長家族的な世帯が所有したもので、平安時代でも一般農民が収穫具でさえ各戸・各自で所有することは認めていない(高橋 1976)。

こうした所有形態論は、協業や個別経営かなどの労働主体や労働形態をあきらかにしていくとともに、農業共同体内部の構造にまで言及できる手がかりを与えた。このように収穫具の鎌は、実は耕作・開墾具の鋤・鍬とセットで考えられることによって歴史的な評価を与えられていたのである。

さきの都出比呂志も、農具の全般は水稻農耕伝来とともに将来されたことを否定していない。ただシステムとして移入されたため、鉄製農具などは伴っていたとしても少量でし

かなかったであろう。松井和幸は、弥生時代の鉄製鋤・鋤は後期に北部九州で出現をみるという。しかし、これは長方形板の両端を折り曲げただけの刃先にすぎない。また鉄製鎌は同時にあらわれるが、日本では稲の収穫用に用いられたかどうか不明だとする。(松井 1985)。この初期の鎌は曲刃であることに注目しておこう。松井は都出が指摘した第2の画期、すなわちU字形スキ・クワの到来について詳細な検討を加えている(松井 1987)。この高い性能をもった耕具は、5世紀前半代に三国時代の朝鮮半島から伝わったとし、ほとんど形態を変えずに日本で長く使用された。日本では風呂鋤・鋤と呼ばれる農具として近代まで使われていたことは誰でも承知している。松井はそのような優秀な農具ゆえに古墳時代においては「後期古墳の副葬品として古墳1基にせいぜい1～2点」つまり後期古墳の被葬者層が1～2点所有していたに過ぎないと想定する。ほぼ都出の論証と一致した見解であり、有力豪族層の独占的所有が裏づけられている。ここで日本の研究段階をたどっていく前に、朝鮮半島の農具を調べた論考のいくつかをみておきたい。

朝鮮考古学の泰斗である有光教一は、朝鮮半島における鉄製農具の変遷について自身の見解を示している(有光 1957)。この中では、耕作具の犁・鋤・又鋤と収穫具の鎌があげられている。いずれも朝鮮の在来農具(朝鮮総督府 1925)を参考としつつ古墳出土品をあつかったものだ。ここでは鋤と鎌についてみよう。鋤には日本と同じU字形鋤先がある。木製の風呂に嵌めて使用する。また風呂部に穴をあけて柄を差し込んだ鋤も存在する。いずれも新羅の古墳副葬品である。しかし各1個体で多いとはいえない。このU字形の鋤は、朝鮮半島で近年まで使われていた「カレー」と呼ぶ耕作具とほとんど変わらない。その点日本の古代クワの延長に風呂鋤があることと同様だ。カレーは、大きさにより1人ないし数人で使われた農耕具である。次に鎌については、新羅の古墳出土のものを取り上げている。40例ほどを知りうるとして他の鉄製農具にくらべて多く、鎌の副葬が普遍的であることを指摘している。これらはすべて端部を折り返して着柄する形態であり近年の鎌(ナツツと呼ぶ)のように^{なかこ}茎をもたない。

さて1972年に刊行された『韓国の考古学』その時点では最新の成果が盛られたものだ。その中で李殷昌は農耕具をまとめている(李 1972)。農具は開墾起耕具と収穫具とにわけて鋤・鋤・鎌などの出土例を掲げている。確かに事例が増しただけ傾向がつかめるようになった。分布は新羅地域だけでなく百済や伽耶地域にまで拡大し、比較検討が可能となった。とくに鎌は、北部・西部と南部の対比ができるようになってきたことで、特性を知る手がかりが増した。しかしまだ形式の設定などには届かなかった感がある。

東潮は、1978年時点で集成できた78例の農耕具をもとに、朝鮮三国時代の農耕を復元しようと試みている(東 1979)。東は起耕具の鋤・鋤・又鋤、収穫具の鎌といった農具の数や出土遺構、そしてその分布を詳細に調べ上げて分析している。注目されるのは、鑄造の斧形鉄製品についてトウグワと推定するところである。これは細長い長方形を呈した斧形鉄器で、袋状の着柄部をもつ。韓国では慶州の古墳、洛東江下流域の古墳群などからも出土がみられ、その数は370例以上にのぼる。日本にも類例が多くあり、5・6世紀の

古墳の副葬品になっている。片刃で身の長い形状と鑄造という素材から、斧よりも耕作用のトウグワ的な機能をもたせている。これには都出比呂志なども同じ考えをもつ（都出 1989）。

東の集成の中で、起耕具である鋤・鍬は 53 例ほどしかなく、U 字形鋤はこのうちの半数ほどと限られた数しかない。欠けた耕作具を補うものとしてトウグワが有力視された感がある。このことは鎌と供伴する斧の事例とともに後述したい。さて収穫具の鎌については、130 例を挙げ、直刃と曲刃形態をわけている。時期は出土した古墳群から 4～6 世紀を与えているが詳しい変遷は示されていない。分布は漢江以南では半月形鎌、中部・西北部では曲刃鎌が、東北部では直刃鎌が盛行するという。この分布と鎌の形態差は収穫物の違いを示し、これは文献資料からも裏付けられるとしている。

さきに鉄製スキ・クワについて見解を表明した松井和幸は、その続編である「鉄鎌について」を発表する（松井 1993）。これはわが国の鉄鎌全体を見通した農具論であり、製作技法にもおよぶが、次の 2 点は興味深い。ひとつは古代の住居内から鉄鎌が複数出土する例を取り上げ、鉄鎌は使用しない期間には木柄からはずして保管されると想定したところだ。かなり普及が予想される 8～10 世紀の段階でも、なお有力な住居に一括保管されることの証左だとみている。ふたつ目は、朝鮮半島における鉄鎌事情をのべていることである。半島への鎌の伝播は中国戦国時代にあり、原三国時代には三国時代と同じ形態鎌が出現する。ほぼ中国漢代の影響をうけて製作されたものであるが、前代にあった石鎌を金属で模倣したものだとする見解もある。ここで朝鮮半島の鉄鎌には、木柄に装着する折返しが二様あることに言及し、大半が日本列島の鎌とは異なる曲げ方をとっていることを指摘する。この点は、日本の鉄鎌がほぼ朝鮮半島からの影響で成立するにもかかわらず、大きな相違となっている。松井はその要因を、当初二様の形式鎌が伝わったが、日本では一方のみが採用されたか、渡来した鍛冶集団が一技法にこだわり続けたかのいずれかだとする。興味深いのが、半島における鉄鎌情報の一部でしかなく、これ以外には言及がない。

初期鉄器と鉄製農具の素材となる鉄生産研究については、李南珪の朝鮮半島を概略的にみた報文で知ることができる（李 1991）。原三国時代までを通観したものだが、農具は鋤と鎌がとりあげられているがわずかである。挿図からは U 字形鋤が大同江流域にも認められること、曲刃鎌存在することが知られる。

2010 年、金想民による「韓半島における鉄生産研究の動向」が発表される。農耕具の素材となる鉄生産と製造工程である鍛冶工房遺跡について最新情報を紹介したものである（金 2010）。これによれば韓国の鉄・鉄器生産遺跡は 61 ケ所あり、このうち鉄精錬遺跡 9 か所、鑄造遺跡 5 ケ所であるという。残りは鍛冶遺跡であり、47 ケ所だ。鉄精錬炉は中部内陸の忠州・清原、東南部の昌原・金海などで発見されている。いずれも 4・5 世紀である。鑄造遺跡で溶解炉等が検出されているのは東南部で慶州・大邱、中部では漢江下流域のソウル近辺などがある。慶州隍城洞遺跡では紀元前後から 3 世紀に、中部ソウル風納土城では 4 世紀に活動した。これらを中心にして鉄素材が供給されたとみることがで

きよう。農耕具を生産した鍛冶炉をもつ遺跡は、中部内陸部と東海岸部、東南部の海岸地域、そして西南部の栄山江流域地域に集中して存在している。原三国時代からはじまり三国時代に連続している。これらは後述するように、農耕具出土遺跡の分布とは必ずしも重ならないところがある。鍛冶生産が鉄製生産地を中心にほぼ集中的に行われることを示していると考えられる。金は、4世紀ではこうした流通システムは顕著ではないが、農耕具の豊富になる5世紀では鉄生産の細分化と流通の地域性が出てきて、「鉄生産地から鉄素材を受け取った大規模集落は、精錬素材、あるいは製品を製作し、周辺の集落に供給するシステムがあったと捉えることができよう」とする重要な指摘をおこなっている。その後の韓国の鉄製農具研究動向は把握できていない。再びわが国に眼を向けてみよう。

川越哲志は鉄鎌について、形態よりも大きさ（刃長）を要素に分類を試み、機能を類推した研究を発表している（川越 1977）。これは弥生時代の収穫具について発展と背景をのべたものだが、石包丁から鉄製の穂摘具へ、そして鉄鎌へ変遷していく経過のなかに鎌の大小が関わってくることを見通した。これを評価し、さらに発展させたのは寺沢薫である。寺沢は都出比呂志の形態重視の分類を否定し、単純に刃長を基準とする大別案を提示した。これは近世の鎌がその大きさによって、機能・用途が分けられていることに注目したことによる（寺沢 1991）。まず鉄製の穂摘具を別として、鉄製鎌を大中小の範疇で分ける作業をおこなった。小は刃長10～12cm、中は10～16cm、大は17cm以上で、用途はそれぞれ、穂切鎌、根刈鎌、草刈・枝払い鎌と考えられるとしたのである。これに細別項目として直刃・曲刃、着柄角度などを分類し、編年作業と詳細な機能付与に役立てようとした。この中で穂刈具とした小型鎌の存在は5世紀中葉を境に減少傾向に転じ、稲の根刈法が定着しつつある状況が示されるとした。しかし、東日本などではまだ穂摘具が残り、穂首収穫法が続けられているとも指摘する。そして根刈の完全な定着は11世紀の大開墾時代を待たなければならなかったと説いている。稲の根刈は収穫量の増大につながる大きな問題であり、これがいつ達成されたかは重要である。同じ問題を衝いた平野吾郎は、寺沢薫の仕事に「従来の諸論文に較べ説得力をもっている」と評価をあたえながらも、刃長の大区分だけで機能を設定するのは不十分とする。なによりも実際にどのような鎌が稲刈鎌なのかを抽出する必要があるというのだ（平野 1994）。平野は、静岡県下71例の鉄製鎌を集成し、これを刃湾曲度・刃長・刃幅・着柄角度をもとに5分類した。この基準は近現代までに採集された鎌の計測結果を応用するという手続きをとったものである。この結果、各計測値にばらつきが大きい鎌ときわめて偏差が少ない鎌、すなわちその形態差が大きく用途多様な鎌（草刈鎌等）と形態差が小さく限定された用途の鎌（稲刈鎌・桑切鎌）と分けられることを導いたのだ。限定された偏差値の小さい鎌とは、C類である。刃長13～17cm、刃幅2～3cm、細長い形態で曲刃である。古墳時代後期から確認でき主体は奈良時代である。26点が確認でき全体の36パーセントとなるが、奈良時代では9割近くがこの手の鎌であるから、この時期に根刈が定着したものと考えられるとした。根刈に使う鎌の特性を客観的にあきらかにしたことは、朝鮮半島の鉄鎌をみていく参考となる。

こうした鉄鎌の機能論は一定の成果をあげつつあったが、所有の格差などを根拠とした農業経営の構造などの問題は、都出比呂志の指摘した以後はほとんど進展がみられない状況が続いている。都出は1989年に、先の論考を大幅に手直した「農具鉄器化の諸段階」を著し、自説を補強している（都出 1989）。その補強の中には鑄造斧形鉄器を起耕・開墾具と考えるような重要な指摘もあるが、一方での鉄器の所有形態から、労働編成や経営形態に踏み込んだ仮説はかなり後退している。

近年に発表された鉄製農耕具がテーマで、かつ所有論や画期に触れた論考は、次のようなものだ。古庄浩明は、関東地方の集落跡等241遺跡、843個体の農工具資料（鎌・鋤・手鎌・紡錘車・斧）を用いて検討している（古庄 1994）。基礎作業の中に1遺跡あたりの農工具保有数という項目があった。これによると鉄鎌は1遺跡あたり2.1点、鉄鋤は0.2点であり、これは5世紀から10世紀にわたる数字であって、実際は8世紀以前には無に等しい。古庄はこれらの資料が集落内からどのような出方をするかなどを検証し、労働形態を類推している。魚津知克は、都出の農具の画期について批判を試みている（魚津 2003）。朝鮮半島からU字形鋤・鋤先と曲刃鎌のセットが一挙に到来して画期が興ったのではなく、「(古墳時代)中期前半において木製農具の地域差や鉄器製作技術進展度の差といった壁に」阻害されて決して一様ではなかったというもので、つまり画期と呼べるものなのかという意見である。中期前葉では、曲刃鎌・U字形鋤・鋤がセットになっているのは北部九州だけであり、全国的にセット化が浸透するのは中期中葉から末だとする。したがって変化は漸移的で、画期ではないと主張するのだ。しかし今回調べた朝鮮半島においても、古墳副葬品をセットと捉えれば、鎌・鋤鋤が共存している例を探すのが難しいほど少ない。むしろ起耕具を欠くことが一般的であったと考える方が正しいようである。都出のいうセット化は、特定有力層における場合を想定したのである。

以上にわたってわが国の鉄製農具中心の研究略史をみてきた。その中に朝鮮半島の鉄製農具、中でも鎌について多少のヒントをみつけておいたつもりである。次節以降でそれらが生かしつつ記述を進める。

2 出土資料の分布

今回朝鮮半島の鉄製鎌を集めるきっかけとなったのは、中国東北地方の古代中世の鉄製煮炊具・農耕具をみてきた折に、それらの分布が朝鮮半島にのびていることを確認したことからはじまっている。わけても朝鮮三国時代の古墳群から出土する鉄製鎌は非常に多量にあることを知った。農工具にかぎらず武器・馬具・装身具も多くあることも特徴だ。しかしつづく統一新羅に入ると出土資料は激減していく。これもどのような理由があるのか興味深い。そこで対象地域を朝鮮半島にしぼり、可能なかぎり資料を集めてみることにした。とはいえ事実上北朝鮮（共和国）の資料は入手が困難であり、ここでは割愛する。

採集できた鉄製鎌資料は80遺跡から総数623点をえている。これらはすべて韓国の調

第1図 鉄鎌出土遺跡分布図

1 ソウル紅蓮峰 2 ソウル石村洞 3 軍浦富谷洞 4 龍仁水枝 5 水原古邑城 6 華城馬霞里 7 烏山水清洞 8 奉業寺 9 東海北坪
10 天安龍院里 11 青陽長承里 12 清州鳳鳴洞 13 清州新鳳洞 14 清原主城里 15 清原梧倉 16 大田九城洞 17 公州南山里
18 扶餘甌山里 19 安東道塔里 20 尚州新興里 21 尚州軒新里・城洞里 22 尚州新上里 23 尚州青里 24 金泉扶桑里
25 長水三顧里 26 南原乾芝里 27 咸安道項里 28 咸安堂沙里 29 陝川倉里 30 陝川亭浦里 31 陝川鳳溪里
32 陝川玉田古墳 33 陝川礮溪堤 34 高靈池山洞 35 高靈本館洞 36 高靈快賓里 37 星州星山洞 38 蓬城汶山里
39 大邱時至地区 40 大邱八達洞 41 大邱西邊洞 42 大邱旭水洞 43 昌寧校洞 44 昌寧桂城 45 慶州栗洞 46 慶州花谷里
47 慶州飾履塚 48 慶州隴南洞 49 慶州月城路 50 慶州皇南洞 51 慶州奉吉里 52 慶州孝門洞栗洞 53 産陽校洞里
54 梁山平山里 55 梁山北亭 56 東萊福泉洞 57 金海礼安里 58 金海龜旨路 59 金海大成洞 60 釜山堂甘同 61 金海良洞里
62 昌原道浚洞 63 昌原加音丁洞 64 光陽馬老山城 65 住岩 66 羅州伏岩里 67 月松里造山古墳

査報告書収録の資料を集成したものである。韓国における発掘調査は近年その数を増大させており、またそれらを集中的に開架収蔵する施設も少ないことから、私が目にしたものはほんのわずかなものと認識している。しかし基本的な範囲の遺跡群は拾われているのではないかと思う。鉄製鎌出土の80遺跡（1遺跡は鋤先1点だけであるが、前方後円墳形墳丘墓）の分布を示したものが第1図である。一見してわかるとおり慶尚北道・南道、忠清北道・南道、京畿道に集中する。河川の流域沿いではあるが、資料の出土はほとんど古墳群であることから、肥沃な平地・盆地を有する地域に立地したものである。南西部の全羅南道と北東

第2図 エリア区分図

部の江原道にわずかな遺跡がみられるが、鎌出土に限っているからであり、実際はもっとあるであろう。

さて慶州北・南道の分布をよくみると、海岸より、内陸そして北方の3か所に見事に集中している。とくに海岸域の慶州から釜山・昌原にかけての地域は多くの鉄製農具が発見されている。洛東江中流域の大邱・高霊・陝川もまた多くの出土をみる。ともに開発が多く行われたことによるものであろう。こうした出土傾向は、収穫具としての鎌の性格を考え合わせれば背景を探っておく必要がある。そこで出土遺跡の分布をもとにして、朝鮮半島南部を大きく5エリアに分割してみたのが第2図である。Aエリアは、いわゆる嶺南地方である。Bエリアは、湖南地方で半島有数の穀倉地帯、Cエリアは湖南地方、Dエリアは京畿地方そしてEエリアは嶺西・嶺東地方で一部に湖西地方を区分する。嶺南地方はこのままでは広域のため、先にみたような遺跡群の集中ブロックをもとにA1～A3エリアに細分した。このように地区区分した理由には、半島の地形・気候と近世の土地利用・作物作付状況などが反映されるからである。Eエリアは9月の平均気温が20度、A1エリアと全羅南道南部は平均気温が22度。したがって他のエリアはこの間の気候である。作付作物はEエリアが畑作・小麦地帯、Dエリアは水田・畑作で稲・大麦を主としている。CとAエリアは畑作水田の中間地帯と呼ばれ、おそらく灌漑水田が広く行われたところだ。畑作は大麦と綿である。Bエリアは水田地帯であり、稲・裸麦・綿を作った（久間 1950）。このような作付区分は、李朝時代も変わらなかったとみえ、「北に畑作、

南に水稻」という表現や「土品論」など地味に関する記述を通して伝えている(李・飯沼 1989)。これ以外に畑作には雑穀として大豆・小豆・稗などが作付された。したがって収穫具がどのように適用されたかを吟味する必要がある。

3 鉄鎌の形式分類

前記したとおり、中国東北地方でも鉄鎌資料の集成をおこなっている(服部 2012)。この時にも分類をおこなっているが、資料が少ないことと、古代中世にかかる鎌資料の全体を分類したためにきわめて大雑把である。しかし一度決めた分類を崩す混乱を避けるためにこれを踏襲し、資料の増加した部分を目的にそって細分することにする。

今回収集できた鎌は、大きく分けると無茎^{なかつこ}と茎付曲刃鎌である。前者は先論では鎌Ⅰ式、後者は鎌Ⅲ式とした(第3図)。鎌Ⅲ式は、茎を伸ばして木柄部に挿入する形態であるから、これが長短・丸角・扁平などどのように変化しようとも基本的に変わりはないものだ。そこでここでは4例ある茎付鎌をすべて鎌Ⅲ式にまとめ細分はしないでおく。馬老山城例は統一新羅、奉業寺例は高麗時代に比定される。

さて、残された大半の資料は鎌Ⅰ式の範疇である。当然細分を試みて型式秩序を与えておかなければならない。そこで大きく直刃(A類)と曲刃(B類)に区分し、その形態差をもとに分類をおこなう。なお、鎌Ⅰ式は、着装部折返しの形式であるが、ほとんどの場合刃を下側にし、先端を右側に向けると折返しは手前上向き側になる。日本ではこれが逆になる例が通例なので注意されている。

鎌Ⅰ式A類 いわゆる直刃系鎌を一括する。基本的な要素は、板状の素材を鍛造して背と刃を作出するもので、身長が短くそれに対して身幅がある。細部の特徴から4細分できる。

A1類は板状素材をほとんど加工せずに先端を切先状に作り、基部を折り曲げている。折り曲げた角度は個体によって様々であるが、多くは著しい鈍角の折り返しはない。

A2類は背・刃部がややカーブし先端が嘴状に曲がる。長さとの比が7:1ほどである。折り返しは直角が多い。

A3類は2類形式に、基部の木柄を着装する部分を意識的に作出したもの。したがってここにはまったく刃部を作らない。

A4類は基部側より先端部が肥厚するタイプである。その結果先端の曲りが強くなり、曲刃のような形態になるが、全体的にみれば直刃鎌である。

鎌Ⅰ式B類 次は曲刃系である。これも細部特徴から4細分できる。

B1類は素材が板状であるが、そもそも細長い長刃鎌を意識的に作るものである。これをみかけの形態から直刃鎌に含めるのは誤りだ。長さとの比は8:1を超え、身の厚みもある。背・刃側が直線的に伸び、先端は屈曲するように内側に折れ丸みをおびる。

B2類は典型的な曲刃である。素材を鍛造して曲線的に加工している。ほぼ均等な身幅

第3図 鉄鎌形式分類図

をもち、先端はとがらずに曲げられている。基部折返しは直角である。

B3 類は B2 類形式に、基部着装部を意識的に用意したもの。

B4類は形式的にはB2類を長大化させたものだが、そもそも長手の鎌として意識された収穫具であろう。全体に細身で先端は長く尖り気味にカーブする。類例は多くない。

4 鎌Ⅰ式の資料

韓国内から採集された鉄製鎌Ⅰ式は、総計で600例以上ある。これをすべて示すことはできないが、対象を知らずしては議論にならない。従来の多くの論考はこの部分が手薄であるが本稿ではスペースを割いて掲げる。この時、先に示したエリア別に提示してみることは必要であろう。それは鎌の地域別形態差をみることにつながると考えるからである。

A1エリアの鎌Ⅰ式資料(第4図) A1エリアには多くの鉄鎌出土遺跡がある。ほとんどは土坑墓・石郭墓などの墳墓群であるが、良好な出土例に恵まれている。したがって資料の数は多い。A1エリアの遺跡24か所、およそ187点の資料が出ている。慶州孝門洞栗洞・奉吉里・金海礼安里などの古墳群からの出土が多い。ここでは4遺跡を選んで鎌の図を掲げた。図では鎌先が右側になるように統一されているが、これは着柄部折り返しを上向きにしているためである(日本では乙手法と呼ぶ)。慶州飾履塚例(35)は、この折返しが反対側であるから鎌先が左側になる(日本では甲手法と呼ぶ)。また金海礼安里の1点(29)も鎌先を右にしているが、折り返し部は下向きであり甲手法だ。A1エリアには曲刃(B類)が少なく、直刃鎌の卓越するところであるが、その中にも典型的な曲刃鎌(11・13・26・28・33・34)を見出すことができる。時期は慶州隍城里のA2類鎌は1世紀にまで遡る資料だ。

A2エリアの鎌Ⅰ式資料(第5図) このエリアには21遺跡161点の資料が採集されている。A1エリアにおとらない出土量がある。陝川鳳溪里古墳群が多くの資料を残しており、このほとんどがA2類であることに特徴をもつ。A1エリアよりもさらに直刃鎌卓越地域であると考えられる。この中で陝川礪溪堤古墳群の資料は注目される。長さ7・8cmのA2類鎌が出土していることである。古墳副葬品であるからミニチュア製品とする考えもあるが、桑枝切鎌のように特化したとも考えられよう。陝川鳳溪里の鎌はA・B類をあわせて比較的大型である。これは使用上どのような収穫具であったか非常に興味深い。道項里の中に1点(11)、甲手法の鎌がある。

A3エリアの鎌Ⅰ式資料(第6図) このエリアからは9遺跡118点の鉄鎌資料が採集された。そのうち尙州新興里では36点の鎌資料があり、また軒新洞でも30点の数を出土している。図示は尙州新興里・軒新洞、安東造塔里などの資料を示す。この地域も同じくA類の直刃鎌が多い。新興里では36点のうち6点がB類曲刃鎌であるから、収穫具の主体は直刃鎌が担っていたことになろう。またこの新興里の鎌には着柄の折り返し部が鈍角のものが多くみられる。これは直刃・曲刃鎌の両方で共通しているから、少なくとも着柄は同様にする場合があったことを知る。新軒洞・造塔里の鎌の中にもやや鈍角のものが散見している。

Bエリアの鎌Ⅰ式資料(第8図) Bエリアの鉄鎌出土遺跡は6遺跡あり、15点の資料

第4図 A1 エリアの鎌I式集成

がある。比較的まとまっているのは、南原乾芝里で8点ある。すべてB類の曲刃鎌である。この古墳群には統一期土器様式の坏形土器が入っており6世紀末から7世紀に比定でき

第5図 A2 エリアの鎌Ⅰ式集成

る。B類単一になるのは新しい様相かとも思える。長老山城出土の曲刃鎌(11)は、報文によれば統一新羅時代とされているので7世紀のものであろう。その他の遺跡でもB類

第6図 A3エリアの鎌I式集成

鎌のみのところが多い。

Cエリアの鎌I式資料(第7図) Cエリアは百済の中心部であるが、古墳が磚室墓であ

第7図 Cエリアの鎌I式集成

ったために遺物が盗掘をうけて残らなかったといわれていた。しかし近年土坑墓の検出が多くなり、副葬品が多量にみついている。鉄製鎌出土の遺跡は9か所で、106点の資料

第8図 B・D・Eエリアの鎌I式集成

がある。

ほぼA類直刃、B類曲刃が半ばしている。ここには比較的多い点数を有している清源

出土地 A1：1 隍城洞 2 八達洞 3 大成洞 4 七山洞 5 七山洞 6 礼安里 7 奉吉里 8 尚州青里
9 花谷里 10 奉吉里 11 花谷里 12 礼安里 13 礼安里 14 礼安里
A2：15 道頃里 16 鳳溪里 17 尚州青里 18 大邱旭水洞 19 昌寧桂城洞
A3：20 軒新洞 21 軒新洞 8号 22 軒新洞 23 尚州新興里 24 扶桑里
D・E：25 馬霞里 26 東海北坪 27 東海北坪
編年根拠土器資料：28 大成洞 29 七山洞 30 軒新洞 31 奉吉里 32 鳳溪里 33 青里 34 旭水洞 35 扶桑

第9図 瓦質・陶質土器編年と鎌Ⅰ式の変遷

梧倉、天安龍院里を中心に、清州新鳳洞、主城里などの資料を掲げる。梧倉では直刃鎌が多く、龍院里では逆に曲刃鎌が多くを占める。新鳳里でも曲刃鎌が主体である。梧倉遺跡の資料の中で興味深いのは木柄の木質が多少遺存していることである。これをみると、折り返し部が直角にもかかわらず、木質は斜めに残っており、わざわざ柄を鈍角に据えて使用していることを示している。

D エリアの鎌Ⅰ式資料（第8図） D エリアは9遺跡を数えることができるが、その種類は石室墳・土坑墓・山城・堡壘跡・集落跡（住居跡）など多彩だ。35点の鉄鎌がある。A類直刃9点のほかはB類曲刃に分類できる鎌である。曲刃鎌優勢地域といえるだろう。華城馬霞古墳群では、長手のB類鎌が特徴である。軍浦富谷洞も同形式の鎌が多く出土する。ソウルの紅蓮峰高句麗堡壘遺跡からはきわめて大形のB類鎌が出土している。その大きさから武器ではないかという説もある。

E エリアの鎌Ⅰ式資料（第8図） E エリアからは1遺跡をとりあげる。石槨土坑墓から出土した資料である。5点あるがすべてB類曲刃形式である。

5 形式変遷と年代

以上のように収集資料について形式分類をおこない、標本を提示してきた。これを整理するためには各形式の流れをつかむ必要がある。すなわち形式の変化とその方向だ。しかし今回の無茎鉄鎌資料には、ほとんど法則性がなく明確な変遷を追うことは難しかったのである。次の図で説明しよう（第9図）。これは現在もっとも進化している土器の編年を軸にして、共伴する鉄鎌を並べたものである。土器研究が進展しているのはおもに嶺南地域、つまり本稿でいうAエリアである。慶州隍城洞古墳ではA2形式鎌と牛角付長頸壺が共伴している。申敬澈によればこのような瓦質土器は前1世紀～3世紀に使用され、4世紀には陶質土器に転換するという（申 1991）。この資料の時期的な位置を1世紀としておこう。八達洞では無文の牛角付長頸壺があり、大成洞のB2形式鎌も同じだ。するとA・B類直刃・曲刃鎌ともすでに紀元1世紀前後には登場していることになる。つづいて金海七山洞では無窓の陶質土器高坏がA2形式鎌と共伴している。この高坏はいわゆる洛東江東岸様式よりは確実に古式である。したがって4世紀を決める資料でよいであろう。

陶質土器の編年の鍵となっているのは、発達した脚と上下2段に窓をもつ高坏で申敬澈が「洛東江東岸様式」とした土器で、年代を5世紀におく。この高坏と共伴する鎌は多く、年代的な定点となりうる。まず高坏の形態をみると、もっとも発達した2窓脚の前後は、その萌芽の小窓を有する短脚形態と窓孔喪失の長足形態が占めることはあきらかである。これに伴う鉄鎌の年代的な根拠は十分に与えられる。しかし、ここに位置する鎌形式はA・B類が存在している。しかも形式的にはA1・A2類、B1・B2類を含み、時間的に先後関係がありそうな鎌形態が共伴するのである。続いて過渡期的な1孔形態の高坏を経て、統一様式と呼ぶ短脚高坏（高台付蓋坏）が共伴する。この様式土器は新羅の

進出に伴ってその版図内に浸透したもので、6世紀末から7世紀の標識となる。まず旭水洞(34)はやや高い脚に小さな1孔をもつもので、比較的古式だ。これと共伴するのはB2類の曲刃鎌である。扶桑里では簡素化された蓋付高坏(35)があり、典型的な統一様式である。これに伴うのはA2類鎌である。以上のようにこの6世紀段階でも各分類形式の鎌はまったく変化の兆候をみせず共存していることが知られる。

統一様式は、嶺東地方にもおよび、Eエリアの北坪遺跡ではかなり新しい様相の蓋坏とB2類曲刃鎌が共伴して年代を決めている。礼安里古墳群においても統一様式とA・B類鎌が共伴しており、6・7世紀の事例は豊富である。

このほか、馬具や鉄鏃など詳細な編年研究を経た資料との共伴で年代根拠とする例がある。Dエリアの馬霞古墳群では、シャベル状引手をもつ轡が共伴、A2エリアの道項里古墳群ではF字形轡が伴うなどである。またA1エリアの慶州隍城洞古墳群では瓦質土器とともに無頸鉄鏃が出土しており1世紀ごろの年代観を補強している。

このように土器の年代にそって整理してみると、鎌の形式はA・B類とも1～6世紀の間ほとんど大きな変化を生じていないことがわかる。形式分類は編年には役立たなかった感が強い。もっとも報告書の中で遺構・遺物を編年する作業が行われている例をいくつかみるが、鉄鎌の編年が分かりやすく並べられているものはない。(慶州花谷里古墳群・華城馬霞古墳群等)。まずひとつは鉄鎌の形態のみをとらえて形式分類をするのは限界があることだ。同じ形態でも厚みや重さ鍛造の精度など観察点はいくらでもあろう(河野 2012)。こうした作業を踏まえて形式分類されれば、もっと秩序だった流れがつかめるかも知れない。一方で三国時代の鉄鎌はあまり形態を変えなかったことも事実で、今はこの実態を認めて評価せざるをえないと考える。

第10図 直刃・曲刃鎌の出土割合

第 11 図 鉄鎌の刃長・刃幅の相関グラフ

6 鉄鎌の分析と共伴関係

朝鮮半島南部の鉄製鎌Ⅰ式が以上のような分布・変遷をとげてきたことは一応把握された。ここでは鎌Ⅰ式について統計的な解析と出土遺構の性格・共伴する農具などを検討する。その結果をもとに朝鮮半島南部の鉄鎌の特徴などを導きたい。

鎌形式の割合 まず、前の説明では具体的に示さなかった、各エリアの鎌形式とその割合をみておこう。第10図にはA・B類鎌すなわち直刃・曲刃鎌の出土割合（保有の状況）を調べたものである。この中でAエリアつまり嶺南地方はA類鎌（直刃鎌）の卓越地帯であることが示され、対してB・D・EエリアはB類鎌（曲刃鎌）が勝っているのである。そしてCエリアの湖南百済地域では、A類・B類鎌がほぼ拮抗する状況がみとめられる。

鎌の法量 次に鎌の法量について検討しよう。鎌の刃長は鎌の機能・用途を規制しているようであり、研究史の中でも取り上げた平野吾郎の考察のように、例えば稲刈鎌は一定の刃長の中におさまっている。そこでA類鎌とB類鎌の刃長と刃幅をグラフにおいて示したものが第11図である。

A1エリアでは量的にまさるA類鎌が刃長10～25cm、刃幅2～5cmの間の法量を示している。ところがB類は刃長15cm以上で25cmまでにまとまっているのだ。この点でかなり限定的な使用形態が予想されるのである。一方で大きさの範囲が広いA類鎌は多様な用途に使用されたとみてよい。以下同じようにA2・A3エリアをみてゆき、次にB～Eエリアの鎌の大きさを比較してみたい。A2エリアのA類鎌は7cm～30cm、刃幅も1～4cmという大きな法量領域を示し、多様な鎌の様相を示している。一方B類は刃長12cmから22cm、刃幅1～3cmとかなりまとまった法量である。しかしこの法量域ではA類の中に取り込まれて目立たない鎌ともいえるが、刃部は短くおそらく目的的に使用される鎌であったと思われる。しかし、刃長が10cm以下にも範囲がひろがっているのは、鉄製鎌の副葬品に模造品が含まれているためである。これはB類の中10cm台の小型品も同様である（しかし桑切鎌などに特化した可能性もある）。鎌の形態についてA1エリアと大きく変わることはない。次にA3エリアをみたい。ここではA類鎌は、刃長12cm～23cm、刃幅1.5cm～3.4cmである。少しだけ刃長が短い形態に変化したととらえられる。さらにB類では刃長20cmにまとまる形態鎌で統一されているのだ。この点、内陸に入った気候環境と農耕の関係が収穫具に反映しているのかも知れない。

次にBエリアである。このエリアにはA類鎌は1点のみであり、比較対象がない。B類の鎌は15cm～25cmで、中心は20cm以下である。曲刃で刈取り専用と思われる鎌であるが、刈る対象は限定できない。

Cエリアは、先にA・B類型が数量的に拮抗した状態だと説明した。しかし内容をみると、B類すなわち曲刃鎌の法量域が10～30cmまでのび、逆にA類は15～24cmに限定されるという結果をえる。Dエリアも同じようにB類鎌の法量領域が12～34cmと広

がっている。対して A 類は 15 ～ 23cm 台の刃長に集中し、統計上にみる直刃鎌の在り方は、ちょうど A1 ～ A3 エリアを反転したような様相を示す。このことから C・D エリアの鉄鎌の形態は、限定的な機能の直刃鎌と多様な用途に使用される曲刃鎌との区分が可能である。資料の少ない B・E エリアも曲刃鎌のみの存在であるから事情は同じであろう。

鎌の所有形態 鉄鎌がどのような階層に所有されているかは、日本では大きな問題であることは研究史の中で触れた。南朝鮮の韓国ではどうであろうか。この地域では集落跡調査の例が少ないため、古墳出土の資料から類推するしかない。収集した鉄鎌は、各種古墳の埋葬施設から出土する。これを分類すると、①墳丘を有する古墳②石室墳③石槨墳④木槨墳⑤土坑墓に分かれる。常識的に①から⑤にかけて序列化してよいと考えられる。第 12 図に A ～ D エリアの遺構に分けた出土量をグラフ化した。あわせて斧・鍬（サルボ）を共伴する事例を重ねてみた。この理由は後述したい。

まず A1 エリアでは墳丘墓に副葬されることが注目される。石室墳や石槨墓にも一定量あり、ある程度の階層に所有されていたことがわかる。しかし、多いのは土坑墓に存在する鎌である。このエリアでは有力層に所有があるととも土坑墓層にも多く行きわたっていた状況を知ることができる。また土坑墓層では、斧・鍬などの農工具を共伴していることが多いことも注意される点だ。A2 エリアでは古墳・石室墳・石槨墓層に所有が集中している。対する土坑墓では鎌副葬の事例数は減少している。A3 エリアでは極端な現象がみてとれる。すなわち石槨墓における副葬例が突出してくるのである。しかも斧・鍬とい

第 12 図 墳墓形式別鉄鎌出土数

った農耕具を併せもつ事例が多い。Bエリアは事例が少ないが石槨墓に集中する。Cエリアは土坑墓のみに出土し、保有はこうした階層に限られる。また斧・鍬の共伴は43例で実に42パーセントにのぼる。Dエリアでは再び古墳・石室墳の副葬が目立ってくる。土坑墓は少ないが、このうちの5例には他の農工具が伴っている。

この結果から総じていえることは、Aエリアの鎌所有は、有力層に偏っていること。とくにA1・A2エリアである洛東江下流域・中流域ではこの傾向は強い。Dエリアにもこの傾向はみられるがまだ数が少ないため限定はできない。また編年的に証明しがたいが、曲刃鎌が集中することから、新羅進出以後の現象と考えられ、Aエリアと同じような背景があったのであろう。対してCエリアはこれと異なって土坑墓群のみに鎌が副葬され、所有はこの階層であることはあきらかである。これを根拠として湖南地方の鉄鎌所有は、土坑墓層に集中していたという見解も可能だ。しかしこの地方の墳墓は、先にも指摘したように有力層は磚室墓に葬られ、盗掘をうけて完全な遺物は残されなかった。したがって低階層にのみ農具が保有されたかどうかは判断できないのである。

甲乙技法の鎌について 着柄部の折り返しが二様あることは先に述べた。日本では刃を下側、刃先を左側にすると折り返しは上側になる例が多い。これを甲技法と呼ぶ(都出1967)。韓国ではその逆形態が主流である。しかし、若干例の甲技法がみとめられている。A1エリアで2遺跡6例、A2で4遺跡18例、Cエリアで2遺跡2例、Dエリアで2遺跡2例ある。Aエリアの例は東萊福泉洞で5例ある。またA2エリアでは高靈快賓洞と道項里に多く出土している。

日本に甲技法が定着したのは、この両地域からの鍛冶工人の移動を想定してもいいのかもしれない。しかしながらこれには証拠がない。

7 朝鮮半島南部の鉄鎌の特徴

以上朝鮮半島南部の鉄製鎌について分析を重ねてきた。まずここまでに分かったことを列挙してみよう。

- ① 鎌の形式を分類しA類直刃、B類曲刃とし、それぞれ1～4類に細分できた。そして最も典型的な形態はともに2類としたものである。
- ② しかしながら各形式に年代をあたえた場合、その変化がみえなくなることを確認した。つまりA・B類各形式とも出現してあまり変化を生ぜずに長期間存続する個性をもっていた。
- ③ 各形式鎌がどのように分布するかを調べた。AエリアはA類鎌(直刃鎌)の卓越地帯であり、B・D・EエリアはB類鎌(曲刃鎌)がA類をうわまわることが知られた。この間のCエリアは、A類・B類鎌がほぼ拮抗している。
- ④ 鎌の個体差については統計的にまとめてみた。A1エリアは、A類鎌が刃長10～25cm、刃幅2～5cmの間の法量を示し、B類は刃長15cm以上～25cmでまとまっている。

これは機能が限定的な鎌と多目的で大きさがばらばらという実態を示したものと理解できる。これが確かであれば、A2・A3 エリアの鎌も同じような内容であろう。C エリアでは、このA 類とB 類が逆転し、B 類の曲刃鎌が限定的な機能鎌として使われている。B・D エリアも同じ様相を示している。このことは半島南部で地域によって鎌の使われ方が異なるという重要な事実を引き出したことになる。

⑤ 鉄鎌の所有形態を問題にした。この結果からは、A エリアの鎌所有は、有力層に偏っていること。とくにA1・A2 エリアではこの傾向は強い。D エリアにもこの傾向はみられる。C エリアは土坑墓群にのみ鎌が副葬され、鉄鎌所有はこの階層（墳墓を営む農民層か）であることが確かめられた。A エリアとC エリアの階層的な対立が図式化されるのかどうか興味深い。

⑥ 収穫具としての鎌は大量にみとめられるが、起耕具の鋤は数例しかない。鋤はサルボをあわせて合計26点。シャベル状の農具は11点。620点に達する鎌と比較して少ないことは明瞭である。耕作具が乏しいことは鋤などが有力層に独占されていて副葬品に入っていないか、木器などが使用されていたことが考えられる。牛馬犁耕を含めてあらためて検討することは必要であろう。そうした起耕具の欠落を補完して鑄造斧状鉄製品をトウグワとして農具に加えた指摘は卓見である（東 1979）。しかし、今回あらためて鉄鎌との共伴例を確かめるとそう多くはないことに気付かされる。むしろ目立ったのは袋状の着柄部をもつ鉄製斧であった。機能はもちろん切裁・断割を主とする工具であろう。この機種は実に228例を数える。しかし、耕地の開墾時に樹木の伐採や根の除去等の作業には欠かせない道具だ。この斧が数多く副葬されているのは、この道具に対する特別な視点が存在したものであろう。私はこうした鉄製斧を開墾具に加えて評価したいと思う。

以上のように分析結果をまとめた。この事実から朝鮮半島南部の鉄鎌をまとめておく。

朝鮮半島の収穫具として登場した鉄製鎌は、出現まもなく直刃と曲刃形態に分かれ切る・刈る機能を受けもつ農具になった。これは今のところ、紀元1世紀から7世紀はじめまで大きく変わらずに推移する。形態変化は朝鮮半島では茎付のⅢ式鎌なかごの出現が契機となる。その時期は統一新羅時代に入るとは馬老山城などの例から確実である。鉄鎌様相（ここではⅠ式鎌に限るが）の大きな差は、地域別に直刃・曲刃鎌採用の違い、地域別に大きさの異なる鎌の用いられ方の違い、地域別に階層的な所有の違いにおいて顕著になる。

まず、直刃鎌が7世紀まで主体的なAエリアには、量的には少ない曲刃鎌が短い刃長を基本にした収穫具として確立されている。この鎌刃形態は、平野吾郎のいう稲刈鎌の法量である。Aエリアは近代では完全な水田稲作地帯である。遡って李朝時代にも同じだとする資料を残す。おそらく三国時代でも、稲作と根刈法が行われた地域であると考えられる。しかし、多様な刃長・刃幅をもつ直刃鎌の多さは、多目的収穫具としての在り方を示しているようだ。のちの近世鎌であるピョンナッツはこの伝統を引いている。一方、曲刃鎌が機能多様に用いられるC・D・Eエリアでは、農業環境は次のように推定されている。Cエリアは水田と畑作の中間地帯、DエリアとEエリアは畑作地帯である。ここで曲刃

鎌が多様に使用されるわけは、麦・綿花と稗・粟などの雑穀を収穫する多様性に対応したためと考えられる。A類直刃鎌の法量が限定的に纏まるのは、この鎌が特定の作物収穫用であることをうかがわせるが、対象が稲刈かどうかは分からない。しかし、この鎌で行う作業は特定されていたと思われる。

鎌の刃長と刃幅の法量から頻度表を作って比較した。実はA類直刃鎌とB類曲刃鎌を纏めてしまうと数値差は表中にはあらわれない。そこで両者を区別したところ、集中と拡散という事実をみることになった。そこで法量の集中は機能限定的な鎌、拡散は多様な鎌で機能はいろいろだと推定した。一番興味深いのはAエリアとB・D・Eエリアで対照的な様相を示したことである。Cエリアはまさに中間様相を示している。この原因は推察にすぎないが、前者Aエリアでは曲刃鎌が、後者のB・D・Eエリアでは直刃鎌が規格的な刃長・刃幅を有するのはそれが決まった作物の刈取りに用いられるものであったことを示していよう。ここでの収穫対象は稲でも麦でもあったが、Aエリアは水田作物、D・Eエリアは畑作物であったと思われる。その他多くの鎌は、草刈りなどの刈り払い道具として用いられたのであろう。

さて、鎌の所有がどのようなレベルかという問題を考えなければならない。本論のはじめに日本の農耕具研究が、この所有形態をめぐって大きく展開してきたことを評価した。それでは朝鮮半島はどうかを探ってみたわけである。もっとも大きな違いは、鋤・鍬などの起耕具が少ないことの事情は同じだが、それに代替する伐採・開墾具としての鉄製斧が存在していることだ。起耕具・開墾具としての鋤・鍬・トウグワなどは古墳・石室墓などの有力層の墳墓にはみられるが、ここに独占されたとする情報は少ない。したがって開墾具を独占し耕地を開いて地域首長に台頭するという構図は描けそうにない。むしろ石槨墓と土坑墓層に、鉄製斧を開墾具として重要視した人々が多いことに注目したい。石槨墓と土坑墓は大きな階層差ではなく中間層としての位置をもつものだ。鉄斧所有に関する限り、この階層が朝鮮半島の三国時代に重要な位置を占めることは疑いない。石槨墓・土坑墓は、調査の中では半島南部の全エリアでほぼ均等に確認される墓制である。このことから半島では中間層の開発意欲が強く展開したのではないか。それはデータによるかぎりA3・C・Dエリアといった南朝鮮の中部から北部にかけての地域だといえるのである。ここは気候的・地質的に制約が多いところで、農耕にはきびしい地帯である。ここを開発したのは、道具としての鉄斧、中耕具・収穫具としての曲刃鎌であったのであろう。こうしてみればA1・A2エリアが鉄鎌の所有についてきわめて優位に立つと評価したのは、農耕条件が恵まれていた結果であると結論して差し支えなからう。

おわりに

以上、朝鮮半島の鉄鎌について論じてきた。起稿するまでは、鎌と起耕具のあり方が日本列島の資料群と相違がないとして、同じ「鉄器所有の階層性」を当てはめる予定でいた。

しかし分析することごとく予想が覆っていき、新鮮な驚きに変わっていった。当初の考えは、日本の弥生・古墳時代の農具から想定される階級社会の起こりは、農耕技術とともに日本に伝わったシステムであるとした。ところが上記のようにあまり適合した事実がないことが判明している。しかしながら逆に、朝鮮半島の農耕の実体を収穫具である鉄製鎌から知ることができたのは大きい。今回は古代の三国時代が主になったが統一新羅時代から中世・近世までの鉄鎌資料を集めて、『朝鮮の在来農具』にみられる近世・近代資料との続きを考えたいと思う。

— 鉄鎌出土遺跡と出典

No.	エリア	遺跡	時代	文献名
1	A1	亀旨路	三国	金海亀旨路墳墓群2000
2	A1	大成洞	三国	金海大成洞古墳群Ⅱ2000
3	A1	七山洞	三国	金海七山洞古墳群Ⅰ1989
4	A1	良洞里	三国	金海良洞里古墳群Ⅰ2008
5	A1	礼安里	三国	金海礼安里古墳群Ⅰ1985
6	A1	慶州飾履塚	三国	慶州金鈴塚飾履塚
7	A1	慶州栗洞	三国	慶州栗洞1108番地古墳群2000
8	A1	月城路	三国	慶州月城路古墳群1990
9	A1	皇南洞	三国	慶州皇南洞106-3古墳群1995
10	A1	陸城洞	三国	慶州陸城洞古墳群Ⅱ2002
11	A1	校洞里	三国	産陽校洞里遺蹟2000
12	A1	池山洞	三国	高靈池山洞古墳群2004
13	A1	下北亭遺跡	三国	梁山下北亭遺蹟1992
14	A1	平山里	三韓	梁山平山里遺蹟1998
15	A1	堂甘洞	三国	釜山堂甘洞古墳群1998
16	A1	加音丁洞	三国	昌原加音丁洞遺蹟
17	A1	道溪洞	三国	昌原道溪洞古墳群1996
18	A1	孝門洞栗洞	三国	蔚山孝門洞栗洞遺蹟Ⅱ2006
19	A1	花谷里	三国	慶州花谷里新羅墳墓群2007
20	A1	奉吉里	三国	慶州奉吉里古墳群2005
21	A1	福泉洞	三国	東來福泉洞古墳群Ⅱ1990
22	A1	福泉洞	三国	東來福泉洞古墳群Ⅲ1996
23	A2	鳳溪里	三国	鳳溪里古墳群1986
24	A2	篋沙里	三国	感安篋沙里墳墓群994
25	A2	玉田M3	三国	陝川玉田古墳群Ⅱ1990
26	A2	芋浦里	三国	陝川芋浦里古墳群1987
27	A2	時至地区	三国	大邱時至地区古墳群Ⅰ2001
28	A2	八達洞	三国	大邱八達洞遺蹟Ⅰ2000
29	A2	道項里	三国	道項里古墳群Ⅰ1997
30	A2	城洞里	三国	尚州城洞里古墳群1999
31	A2	高靈本館洞	三国	高靈本館洞古墳群1995
32	A2	桂城	三国	昌寧桂城古墳墓(下)2000
33	A2	桂城	三国	昌寧桂城古墳墓2000
34	A2	昌寧校洞	三国	昌寧校洞古墳群1992
35	A2	星山洞	加耶	星州星山洞古墳群2006
36	A2	星山洞	加耶	星州星山洞古墳群2009
37	A2	星山洞	加耶	星州星山洞古墳群2010
38	A2	西邊洞	三国	大邱西邊洞古墳群Ⅰ2001
39	A2	旭水洞	三国	大邱旭水洞古墳群2002

No.	エリア	遺跡	時代	文献名
40	A2	?陽里	三国	遼城文山里古墳群Ⅰ地区2004
41	A2	番溪堤	三国	番溪堤古墳群1987
42	A2	鳳溪里	三国	鳳溪里古墳群1986
43	A2	倉里古墳群	三国	陝川倉里古墳群1987
44	A3	扶桑里	三国	金泉扶桑里新羅墓群2009
45	A3	軒新洞	三国	尚州軒新洞古墳群2003
46	A3	新上里	三国	尚州新上里古墳群Ⅰ・Ⅱ2003
47	A3	造塔里	三国	安東造塔里古墳群Ⅱ1996
48	A3	新興里	三国	尚州新興里古墳群Ⅰ1998
49	A3	新興里	三国	尚州新興里古墳群Ⅱ1998
50	A3	新興里	三国	尚州新興里古墳群Ⅲ1998
51	A3	新興里	三国	尚州新興里古墳群Ⅴ1998
52	A3	青里	三国	尚州青里遺蹟Ⅶ1998
53	B	住岩水没地区	三国	住岩水没地区文化遺蹟報告(Ⅶ)1990
54	B	三顧里	三国	長水三顧里古墳群1998
55	B	乾芝里	三国	南原乾芝里古墳群1991
56	B	馬老山城	統一新羅	光陽馬老山城Ⅰ2005
57	C	長承里	三国	青陽長承里古墳群2004
58	C	九城洞	三国	大田九城洞遺蹟1997
59	C	新鳳洞	三国	清州新鳳洞百濟古墳群2005
60	C	公州南山里	三国	公州南山里墳墓群2001
61	C	清原主城里	三国	清原主城里遺蹟2000
62	C	甌山里	原三国	扶余甌山里遺蹟2004
63	C	梧倉遺蹟	三国	清源梧倉遺蹟Ⅰ1999
64	C	清州新鳳洞	三国	清州新鳳洞百濟古墳1990
65	C	清州鳳鳴洞	三国	清州鳳鳴洞遺蹟Ⅱ2005
66	C	龍院里	三国	龍院里古墳群2000
67	D	石村洞3号墳	三国	石村洞3号墳東古墳群整理調査報告1986
68	D	烏山水清洞	三国	烏山水清洞遺蹟2006
69	D	紅蓮峰第1	高句麗	紅蓮峰第1堡壘2007
70	D	紅蓮峰第2	高句麗	紅蓮峰第2堡壘2007
71	D	馬霞里	三国	華城馬霞里古墳群1998
72	D	水原古邑城	中世	水原古邑城2000
73	D	羅州伏岩里	三国	羅州伏岩里3号墳2001
74	D	富谷洞	三国	軍浦富谷洞遺蹟2008
75	D	奉業寺	百濟	奉業寺2002
76	D	水枝遺蹟	三国	龍仁水枝百濟住居址1998
77	E	北坪工団	三国	東海北坪工団造成地域遺蹟1994

謝辞 執筆にあたって次の方々にお世話になった。ご芳名を記して感謝申し上げる。
青池紀子・池上悟・紺野英二・及川良彦・本間岳人・横田雄一

——参考文献

- 朝鮮総督府勸業模範場 1925『朝鮮の在来農具』1991年復刻 慶友社
久間健一 1950『朝鮮農業経営地帯の研究』農業総合研究所研究叢書第14号
有光教一 1957「朝鮮半島における鉄製農具の変遷について」『末永先生古希記念 古代学論叢』
都出比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13-3
有光教一 1967「朝鮮—三国時代の農具と工具」『日本の考古学』VI 河出書房
原島礼二 1968『日本古代社会の基礎構造』未来社
土井義夫 1971「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物質文化』13-3
李 殷昌 1972「農具」『韓国の考古学』河出書房新社
高橋一夫 1976「製鉄遺跡と鉄製農具」『考古学研究』22-3
川越哲志 1977「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集』
東 潮 1979「朝鮮三国時代の農耕」『橿原考古学研究所論集』第4
松井和幸 1985「鉄鎌」『弥生文化の研究』5 道具と技術 I
松井和幸 1987「日本古代の鉄製鋤先、鋤先について」『考古学雑誌』72-3
都出比呂志 1989「農業技術の発達と耕地の開拓」『日本農業社会の成立過程』岩波書店
李春寧（飯沼二郎訳）1989『李朝農業技術史』未来社
寺沢薫 1991「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究』4 生産と流通 雄山閣
古瀬清秀 1991「農具」『古墳時代の研究』8 古墳II 副葬品
申 敬澈 1991「韓国の瓦質土器—嶺南地方の墳墓出土資料を中心に」『日韓交渉の考古学』六興出版
李南珪 1991「韓国の初期鉄器と鉄生産」『日韓交渉の考古学』弥生時代編
松井和幸 1993「鉄鎌について」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集』
古庄浩明 1994「古代における鉄製農具の所有形態」『考古学雑誌』79-3
平野吾郎 1994「稲刈り鎌の出現」『地域と考古学』向坂剛二先生選暦記念論集刊行会
魚津知克 2003「曲刃鎌とU字形鋤先」『帝京大学山梨文化財研究所報告』第11集
金 想民 2010「韓半島における鉄生産研究の動向」『季刊考古学』第113号
服部敬史 2010「高句麗の犁—中国東北地方における古代・中世の犁と鎌」『和光大学表現学部紀要』12
河野正訓 2012「鉄鎌の構造」『古代学研究所紀要』第17号